

津村節子

婚約者

婚約者

津村節子

毎日新聞社

著者略歴

昭和3年6月5日福井生まれ。学習院短大卒業。昭和40年上期「玩具」により第53回芥川賞受賞。主な著書に『玩具』『海鳴』『女の椅子』『夜行時計』『白い炎』『石の蝶』『さい果て』などがある。

婚約者

定価 六二〇円

昭和四十七年六月二十五日 印刷
昭和四十七年七月五日 発行

著者 津村節子
つむら せつこ

編集人 浜田 琉司

発行人 朝居 正彦

発行所 毎日新聞社

東京都千代田区一ツ橋

大阪市北区堂島上

北九州市小倉区紺屋町

名古屋市中村区堀内町

450

802

530

100

印刷 中央精版
製本 大口製本

目次

鍵		3
紫陽花		71
街角で		101
わが罪		133
白い蝶		169
還らぬ日々		197
写真真		221
婚約者		245

装
幀
熊
谷
博
人

鍵

伊佐子はひどく疲れていた。そして寒くて空腹だった。電熱器に薬罐をかけ、伊佐子はそれに手をかざした。電熱器のニクロム線が赤くなって来ると、わずかばかりの熱がやがて凍えた指先を溶かし、じんと浸みるように伝わって来た。軀まで温まるにはほど遠い熱量であったが、伊佐子はあかい色を見ただけで、凍てついたコンクリートの舗道を、ギプスをはめたように筋肉に力を入れて歩いて来た軀がやわらかくほぐれてゆくような気がした。

ドアの隙間から投げ込まれていた封筒をとり上げると、伊佐子はそれを膝に置いたまま、手があたたまるまで上書を眺めていた。茶色のハトロンの紙の封筒で、あまり楽しい便りを予想させるものではなかった。表書の字も事務的な楷書で、なにか請求書の類であろうと伊佐子は裏を返してみた。

伊佐子は、心臓が胸壁に貼りついたようになって鼓動がとまった。

佐治典子

男のような、いかつい大きな署名がしてあった。封筒は、手紙ではないなにか重いものが入れ

られている様子で、伊佐子は開封するのを暫く躊躇していたが、刃の長い裁断鋏で一息に切り落とす逆さにふった。便箋に包まれたものが畳の上に落ちた。包みを開いて、再び伊佐子は驚きのあまり呼吸がくるしくなってあおざめた。

見覚えのある鍵であった。

それは、先日伊佐子が佐治に与えたこの部屋の合鍵であったのだ。鍵の包まれていた便箋には、御自分を大切になさらねばなりません

とだけ、真中に一行書かれていた。封筒の文字に比して幾分乱れが見えるように思えたのは伊佐子の思いすごしであろうか。

封筒の署名の佐治典子という字は、いかにもこの字を何百回となく書いた筆の馴れが見えた。それは、佐治という姓と、典子という名とを切り離すことが出来ないような調和を見せていた。

伊佐子は、未だ嘗て、佐治という姓の下に康夫という字以外の文字が配列されることを連想したことはなかった。佐治に妻のあることは、佐治自身の口から既に聞いていることであった。今更驚くにはあたらずであった。然しながら、佐治典子という署名を目にして、はじめて佐治に妻があるという実感が伊佐子を襲ったのであった。

御自分を大切になさらねばなりません——

この高飛車な押しつけがましい忠告は、妻帯者の中年男に独り住いの自室の鍵を与える伊佐子の若さの無思慮をさげすんでいるようにもとれ、又、自分の嫉妬を相手に気取られまいとする虚

勢のようにも解釈出来た。いずれにしてもこの典子という女が、妻という自分の座が絶対なもので何びとによつてもゆるがせに出来ぬものだを確信しているらしいことは容易に読みとられた。

伊佐子は佐治に逢っている時、佐治の妻のことを考えたことはなかった。佐治の妻に対して苛責を覚えねばならないほど、二人はまだ深い交際にはいつてはいなかったし、伊佐子自身の気持も佐治の妻を意識するほど佐治に傾いていなかった。

伊佐子はその時自分の心を波立てたものを嫉妬であると思った。この、まだ見ぬ、いかつい大きな字を書く四十近い女が、伊佐子の若さに示したあなどりに対しての反撥であるのかも知れないということには思い至らなかった。

伊佐子が始めて佐治に逢ったのは、まだ彼女が洋裁学院に在学中の、クリスマスイヴに催されたパーティーであった。伊佐子は、パートナーがいないからという理由でグループの友人たちの誘いを断ったが、彼女らがめいめい伴って行く青年たちと適当におどればいい。又、会場に行けば単独で来ている青年も多いから、相手に不自由はさせないと執拗に誘われた。

彼女らは会場にあてられていているホテルのロビーで顔を合わせると、それぞれ自分の伴って来たパートナーを友人たちに紹介し合った。いつも自分より年下の学生達にとり巻かれている洋子は、珍しく四十に近い年輩の男を伴って来た。それが佐治であった。彼は、洋子の母の末弟でまだ独身であるという洋子の紹介であったが、姪のグループの臨時パートナーに狩出された事にかなり

迷惑しているらしい様子で、青年達もこの場違いな闖入者に戸惑って話題にも窮していた。

洋子は、叔父を伊佐子に押しつけるように紹介すると、忽ち申込まれた青年に腕を与えて踊りの渦の中に巻き込まれて行った。他の友人たちも、それぞれのパートナーと腕を組んで踊りの群を縫って見えなくなってしまった。

佐治と二人とり残された伊佐子は、当惑しながらも素早く相手の様子を伺った。彼は長身のせいにか少し猫背で仕立のよい背広をくずれた感じに着ていた。相手の服装が気になるのは、自分が貧しいためなのだろうか、と伊佐子はわびしい気がした。

佐治は、一言も喋らず伊佐子の背に軽く腕を廻した。上質なウールの匂いがした。体臭は全く感じられず、背広の中に男の軀があるとは思われぬほど瘦せていた。眼窩が落ちくぼんでいて、病院のベッドから脱け出して来たのではないかと思われるほど顔色が悪かった。

ダンスも、左右の脚を交互に動かすだけで、ただリズムに乗っているだけのものではあったが、それでいながらかなり踊り馴れている。上体が不安定に左右に揺れるのは彼が背が高すぎる為なのか、彼の踊る時の癖なのかわからなかったが、首の生えた背広と踊っているように頼りなく無気味であった。

曲のなかばから踊り出したので、その曲はすぐ終わってしまった。

「バーへ行こうか」

伊佐子はぎょっとして周囲を見廻した。彼のものとは思えぬほど、その声は老人のようにかす

れていた。彼は伊佐子の背に腕を廻したまま、上体をかすかに左右にふりながら熱っぽい踊りの渦からぬけ出してバーのある階下へ降りて行った。伊佐子は急に心細くなって洋子たちの姿を慌しく眼で探したが、ほの暗いホールに、数十組もの男女がびったりとより添ってめぐりめぐって行きすぎてゆく群の中から見覚えのあるドレスの端の色すら見さだめることは出来なかった。階下へ降りて行くと、メランコリックなタンゴバンドの演奏に伴って、潮騒のような床を擦る靴音が聞えていた。

バーは比較的空いていた。

「あんた、伊佐子さん？」

佐治はブランデーを飲みながら、隣の止り木に坐り心地悪そうに腰かけている伊佐子に言った。彼と目を合わせたのはその時だけであった。虹彩の色が薄いせいか、どこを見ているのかわからないような眼であった。

「あんたが伊佐子さんか——」

もう一度繰返すと、佐治は又正面を向いたきり黙りこくってしまった。伊佐子は、彼の口ぶりから佐治が洋子から自分の事を聞いているのだと知った。洋子は、友人の中から予め伊佐子を叔父のパートナーに指定していたらしかった。それがどういう理由であったのか伊佐子は気にかかった。

あんたが伊佐子さんか——と言った佐治の語調に、軽侮とも失望とも解し難いような響きが感

じられたのを、伊佐子は打ちのめされたような心で聞いた。

三月に洋裁学院の師範科を卒業すると、伊佐子は適当な就職口もないままに、近所や知人の服を縫う内職をしていたが、客の紹介でアルバイトにキャバレーへ出ている女子大生がドレスを注文に来るようになった。それが絲口となつて、伊佐子はキャバレーの女達の衣裳を縫うようになったが、ダンサーたちの衣裳は見てくれが良ければ仕立についてうるさい事は言わないし収入も多かった。独立する自信がつくと、両親と姉とを一時に戦災で失ったあと自分をひきとつてくれた伯父の家を出てアパートに移った。洋子たちからはたびたび誘い出しの手紙が来たが、卒業してさえばもう洋子達の世界とは遠くに住む自分であることを否応なく思い知らされる毎日が明け暮れしていた。

やがて洋子たちからも音信が絶え、二年が過ぎた。

その日も伊佐子は、慌しく口紅をさしただけで、長い間セットしない髪を帽子の中へつつこむようにしてアパートを出た。片手にさげているスーツケースを見て、人は夏休みの旅行とでも思ふかも知れない。伊佐子は、長い間旅行というものをしたことがない。両親を失ってから、避暑も遊山も縁のない生活に馴れてしまっていた。このスーツケースの中身がダンサーの仮縫した衣裳でなく、旅行用品がぎっしり詰められていて、向う側のプラットホームに停車している列車に乗るのであったら——、とふと思った。毎夏を過した信州の湖畔の別荘は、伯父の手で、伊佐子

の養育費としてすでに売られてしまっていた。別荘ばかりではない、すべてのものが売り払われて、彼女に残ったものは身につけた洋服の技術だけであった。幸い伊佐子の仕事は忙しく、手のすく暇もない程追いたてられて生きてゆくにはことかかぬだけの収入はあったが、どんなに忙しいからといって女一人の手内職の限度は知れていた。自分が若し旅行するとしたら新婚旅行のときまであるまいと思ひ、果して自分が結婚することがあるだろうかとむなしい気がした。女たちばかり相手の商売は、彼女に異性と接触する機会すら与えなかった。

スーツケースの中の衣裳の主には連絡してあったのでノックするとすぐ返事があった。このアパートは伊佐子の住んでいるアパートとは比較にならぬほど広く、ベッドルームと居間とダイニングキッチンと三室があつて調度品もかなり贅沢だった。愛子というその女は仮縫の衣裳を身につけると、

「どうかしら」

とベッドルームの方へ声をかけた。

パジャマの上にはでなガウンを羽織つた男が出て来た。男は伊佐子を見てちよつと驚いた様子で立ちどまつた。伊佐子は、声も出ずに棒立ちになった。

「妙なところでお目にかかりましたな」

佐治は、油気のない頭髮が額にたれ下るのを鬱陶しそうにかき上げると、充血した眼で笑つた。

弛緩した皮膚から、ひげだけが妙になまなましい感じでのびていた。

「なんだ、あんたたち知っていたの？」

愛子は、二人の様子を見較べながら強い関心を示して言った。

「ああ、昔の恋人なんだ」

愛子は、この陳腐な冗談を無論真に受けたりはしなかったが、しきりとこの偶然を興がった。

「こましゃくれた姪がね、この人を僕の花嫁候補にしていたんだよ。女道楽が過ぎるので、身をかためさせようということになってね」

「あら、それでふられちゃったのね」

「まあ、そんなところだ」

「堅気じゃあ、あんたところへなど、娘を嫁にくれるものもないさ。興信所で調べればすぐわかることだもの」

愛子は陽気に笑った。愛子の充実した筋肉がふるえるように動いた。伊佐子は、手もとが狂って、ダーツを訂正して打っているピンをあやまって愛子の背に刺した。

「あ、いたい！」

「すみません」

愛子は笑うのをやめて、自分の足もとに膝まずいてピンを打っている伊佐子の顔を不意にのぞき込んだ。

「あんだ、この人好きだったんじゃない？」

「え？」

伊佐子が突然思いがけない質問に狼狽するさまを見ると、

「あら赧くなってる」

愛子はけたたましい声をあげて笑った。佐治は薄い笑いを浮べて伊佐子を見ていた。

十二月にはいると、伊佐子は多忙を極めた。気のいい女たちは、頼みもしないのに次々と伊佐子の部屋へ友達を連れて来た。内職であるから、店舗を構えている専門家とは比較にならぬ程安くしていたし、伊佐子が若いので気易く勝手な無理が言えるのも気儘な彼女らに歓迎される理由であった。二人ほど通いの針子をやとったが、それでも手不足だった。

隣室の四畳半が空くと、伊佐子はすぐに契約して、茶だんすや整理だんす、机などのわずかばかりの世帯道具を全部四畳半に移した。そこには常時夜具をのべておいて、仕事が一区切りつくと倒れこむように眠った。

日頃から華やかな色彩に溢れている仕事場は、クリスマスを間近にひかえて一そうその華やかさを増した。一年一度の書入れどきで、稼ぎは衣裳で左右されるかのような焦慮がその注文に露骨に表われていた。

伊佐子のデザインを無視して、彼女らは無闇にデコレーションをつけさせたり、奇抜なカット

を要求したりした。

背中が殆どヒップの上部までV字型に切り込まれたドレスの為のブラジェアを考案させられたり、想像もつかぬところにハート型の窓をあけたドレスを作らされたりした。歩行も困難なほどのタイトなドレスのスカートの中央を脚のわかれ目まで切れ上らせたドレスも縫った。若い針子たちは、彼女らの説明を聞きながら、伊佐子の困惑などよそに無遠慮な笑い声をあげた。それに對して気を悪くする様子もなく一しよにつられて笑い、すぐさま又真剣さを目に集めてさまざまな注文をつけるのであった。

朝から縫っている傍につききりで充分仕上げもすまないのを浚うように最後のドレスを女が持つて行ってしまうと、一時に疲労が全身を覆い、眼の中に無数の星が流れ、指先が麻痺したようになっていた。針子たちに特別のクリスマス手当を与えて帰すと、伊佐子は這うように隣室の寝具に身を横たえた。非常に空腹である筈なのに、食欲が全くないどころか、軽い嘔吐さえ覚えた。夜の勤めを持つこのアパートの殆どの女たちは出払っていて、あたりはひどく森閑としていた。まだ夕方には間があった。近所の中華料理屋から繰返し飽きもせずジングルベルのレコードが流れて来る。それは、浮きたつような降誕祭のよろこびを祝う曲ではなく、最早や破れかぶれの狂躁曲に似て伊佐子の心の中をいらいらとかき廻した。

女たちは、この数日をクリスマスマスの名のもとに、伊佐子の縫ったドレスを着て、薄暗いテーブルの客の間に嬌声をあげ、汗ばんだブラジェアの中にチップをはさみ込んで、七色のライトのめ